

# 園芸春秋

第608号

2

2019

発行所 (一部定価西円千三百円)  
〒606-0823 京都市左京区下鴨  
半木町 京都府立植物園内  
一般財団法人  
京都園芸倶楽部  
電話 075-701-5555 (直通)  
振替口座 0160001663  
発行責任者 木島 温夫

●平成三十年度の会費受付中  
年会費 五、〇〇〇円  
購読料は会費に含まれています。  
なお、過年度会費未納の方は併せてお送り下さい。  
振替口座は0160001663 (財) 京都園芸倶楽部  
払込金受領票を以て当倶楽部の領収書に代えますので、大切に保  
管願います。現金書留での送金はご遠慮下さい。

## 万葉集の「あさがほ」考

### 市 忠 顕

万葉集にある「秋の七種」関連の和歌をあげると、

1537 秋の野に咲きたる花を指折り

かき数ふれば七種の花

1538 萩之花平花葛花瞿麦之花姫部志

又藤袴朝貞之花

「萩の花尾花葛花などしこの花をみなへしまた藤袴朝貞の花」

2104 朝貞(原文は白の下に七)朝露

負咲雖云暮陰社咲益家礼

「朝露は朝露負ひて咲くといへど夕陰にこそ咲きまさりけれ」

2274 展轉恋者死友灼熱色庭不出朝容

貞之花

「こまろび恋ひは死ぬともいちしろく色には出でし朝露の花」

2275 言出而云者忌染朝貞乃穂庭開不出恋為鴨

「言に出でていはばゆゆしき朝露の穂には咲き出ぬ恋もするかも」

朝顔(朝貌)は人目に付きやすい花なのか?

3303 和我目豆麻比等波左久礼杼安佐  
我保能等思佐倍己其登和波佐可流我倍  
「わが目妻人は離(さ)くれどあさがほの年さへこと吾は離かるがへ」  
『植物短歌辞典正編』(針谷鐘吉編、加島書店)の「あさがほ」の項には次のように解説されている。  
【あさがほ(あさがほ) 阿佐加保・安佐我保・朝貌・穂】  
万葉集の中に詠まれた植物で、これが今日の何に相当するかにつき、古来次の四説が行われている。  
(一) むくげ説(貝原益軒・賀茂真淵・鹿持雅澄・加藤千藤・清水卓二)、  
(二) ききょう説(藤井高尚・殿村常久・鴻巣盛広・牧野富太郎・松田修)、  
(三) ひるがお説(狩谷掖斎)、  
(四) あさがお説(伴信友)。  
これらの説の中で(二)が一般に最も妥当と信じられている。】とある。  
以下は市の考察

(1) 1538番の歌は、秋の七種(の花)を列挙したものである。その最後に「朝貞之花」があり、「朝貞」は「朝貌」と同じで「あさがほ」と考えられている。この「あさがほ」は秋の七種の内の一種なので、その花期は旧暦の七月から九月(新暦では八月から十月頃)ということになる。朝顔以外の七種を見ると、萩以外はすべて草本である。萩は落葉低木に分類されているが、冬には茎が枯れて、根(株)だけが残る。これは宿根草に近い。  
(2) 1537番の歌(1538番とセットの歌)では、「秋の野に咲く花を数ふれば」とあるので、「野に咲く花」が条件となる。「野の花」は常識的には「野辺の草花」を連想する。萩は厳密には木本かも知れないが、灌木であり、背が低いので、野の花に入れていいのであろう。しかし、ムクゲはれっきとした木本であり、「野に咲く花」に該当しない。  
(3) 2104番の歌によると、朝顔の花は朝から夕方まで咲いていることになる。現在の朝顔はその花が夕方までではないのでこの条件に合わない。こ

の条件に合うのは上記の四花ではキキョウのみか?  
(4) 2274番の歌からはあさがほが目立つ花である印象がある。(はっきりと顔色には出しますまい。朝顔の花のように) ↓朝顔は花の色がはっきりしていることになる。  
(5) 2275の歌の原文は「穂庭」となっており、この「穂」は「花の穂」の意味で用いられたと考えるのが自然である。従って「あさがほ」は花穂をもつ植物ということになる。  
1538番の憶良の歌には尾花すなわちスキが入っているので、花穂をもつ植物も可となる。麻は花穂をもつ植物であるので、「あさがほ」は「麻が穂(麻の穂)」ともとれる。  
以上の考察から、あさがほ(あさかほ)の条件をまとめると、  
〔1〕秋の野の花(常識的には草花)、これは秋の七種の大前提。  
〔2〕朝から夕方まで咲いている花で、夕方の方が綺麗。  
〔3〕花色・花形などがはっきりしていて、目立つ花

(四頁四段につづく)

○十一月例会記(一一七二回)

十一月六日に名勝東本願寺渉成園(枳殻邸)を尼崎博正京都造形芸術大学教授とこの名勝を直接管理されている植彌加藤造園阪上富男・松本宏海さんらの案内で見学しました。枳殻邸の名の通り、カラタチをたくさん植えられていました。古い絵図から、この庭園の歴史・変化、建物、池、石垣、灯笼、手水鉢などについての説明を受けました。スイレンが覆う大きな印月池の水の供給が時代と共に大きく変わったことなど、一般の見学では知り得ない知識、この名園の維持に大きな苦勞のあることを知りました。ここでも台風二一号の被害は大きく、大木が何本も倒れていました。当日の参加者は三一名でした。



尼崎博正先生の説明

○十一月例会記(一一七三回)

十一月二十日、木島温夫滋賀大学名誉教授から、宮沢賢治が作った花壇につき講演頂きました。童話作家・詩人である宮沢賢治は花をこよなく愛し、多くの花壇を作りましたが、なぜなのでしょう。賢治は生活すなわち芸術のある生きがいを送るため、花壇を作り、農村を花いっぱいにしてしようと考えました。みずから南傾花壇など幾つもの花壇を設計されました。それらは花巻病院花壇に見られるように、現在にも残され人々を癒し続けています。当日の参加者は三十名でした。



木島会長

◆一七五例会のご案内◆

講演 植物のいのちを戴く「食べ方上手」  
—健康寿命は自分で延ばせる—  
食事と健康寿命についてお話しいた  
だきます。  
講師 家森幸男氏(武庫川女子大学国際  
健康開発研究所 所長)  
日時 二月二日(金) 午後一時半より  
場所 京都府立植物園会館二階研修室  
(幹事 森田・木島)

●当日午前〇時から役員会を開きます。

やむを得ず役員会を欠席される場合は、その旨事務局まで連絡下さい。

◆一七六例会のご案内◆

講演 椿と日本文化、椿はなぜ王権の花、賀茂族の花になったのか...  
古事記の仁徳天皇、雄略天皇の条が示すように椿は古代大和王権の花であった。また、賀茂族、修験者の花でもあり、京都上賀茂神社でも御園橋の西に椿原町の地名が残っている。椿の来歴を探り、日本という国の成立の過程について考える。

講師 光田和伸氏(元日文研、国文学者)  
日時 三月二日(日) 午後一時半より  
場所 京都府立植物園会館二階研修室  
(幹事 森田・走り)

●当日午前〇時から役員会を開きます。  
やむを得ず役員会を欠席される場合は、その旨事務局まで連絡下さい。

◆第五九回つばき展のご案内◆

テーマ 京の銘椿と茶花  
開催日 平成三十一年三月二日(金)～二日(日)  
場所 京都府立植物園内 植物園会館一階展示室  
展示内容 京の銘椿、茶花コーナー、主な園芸品種、洋種ツバキ  
関連行事 講演会(第一七六例会) 三月二日(日) 午後一時三〇分より  
講師 光田和伸氏(元日文研) 演題 椿と日本文化  
園内ツバキ園探訪 三月二三日(土) 午後一時から  
主催 京都園芸倶楽部 京都府立植物園

✓(一頁四段より続く)

〔4〕花穂をもつ植物  
となるが、この四条件を全部満たす植物が見当たらない。第四の条件を外すと、キキョウでも好いかも知れないが、第二の条件を完全に満たしているかどうか分からない。キキョウは朝より夕方の方が美しく見えるか? 第二の条件をゆるめて、「秋の野に咲いている花で、朝から夕方まで咲いており、かつ人目に付く花」とすれば、キキョウは当てはまるかもしれない。

参考文献

日本古典文学大系『万葉集』(岩波)  
佐佐木信綱編『新訓万葉集』(岩波)  
桜井満訳注『現代語訳対照万葉集』(旺文社)